

【原文】

五書中善者・使青為下而丹字・何乎・吾道乃丹青之信也・青者生仁而有心・赤者太陽・天之正色・吾道太陽・仁政之道・不欲傷害也・天子者・天之心也・皇后者・地之心也・夫心者・主持正也・天乃無不覆・無不生・無大無小・皆受命生焉・故為天・天者・至道之真也・不欺人也・萬物所當親愛・其用心意・當積誠且信・但常欲利不害・不負一物・故為天也・夫帝王者・天之子・人之長・其為行當象此・天子者・當承父之教令嚴勅・案而行之・其事乃得父心志意・可為良家矣・如不承父教令・其家大小不治・即為貧家矣・財反四去・常苦不聚・其事紛紛・災變連起・大得愁苦・過在此矣・

【訓読】

吾（五）書中の善き者は、青を下と為して丹字ならしむ。何んぞ乎。吾が道は乃ち丹青の信によりて也。青なる者は仁を生じて心有り。赤なる者は太陽にして、天の正色なり。吾が道は太陽、仁政の道にして、障害するを欲せざる也。天子なる者は、天の心也。皇后なる者は、地の心也。夫れ心なる者は、正を持するを主とする也。天は乃ち覆わざる無く、生ぜざる無く、大と無く小と無く、皆な命を受けて生ず。故に天と為す。天なる者は、至道の真也。人を欺かざる也。万物の当に親愛すべき所なり。其の心意を用うるや、当に誠を積み且つ信なるべく、但し常に利して害せざらんと欲し、一物にも負かず。故に天と為す也。夫れ帝王なる者は、天の子、人の長にして、其の行を為すや当に此れに象るべし。夫れ子なる者は、当に父の教令嚴勅を承け、案じて之を行うべし。其の事は乃ち父の心の志意を得て、良家と為す可し。如し父の教令を承けざれば、其の家は大小治まらず、即ち貧家と為す。財は反つて四去し、常に聚まらざるに苦しむ。其の事は紛紛、災變は連起、大いに愁苦を得、過ちは此に在り。

【口語訳】

わが書中の善本は、みな青の下地に赤字で書いてある。なぜなのか。わが道はつまり赤と青の誠信からなるによって。青色は仁を生じて心を保つ。赤色は太陽であり、天の正しい色である。わが道は太陽であり、仁政の道であり、（万物を）傷つけ害することを望まないののである。天子とは、天の心である。皇后とは、地の心である。そもそも心とは、正義を保つことを本分とするのである。天はつまり覆わないもの無く、生じないもの無く、大小にかかわらず、みな天の命を受けて生じる。だから天なのである。天とは、至道の真実である。人を欺かないのである。万物の親愛すべきものである。天の心持は、誠信を積み重ねるものであろうが、しかしいつも利だけをあたえ害はないことを望み、一物の希望にもそむかない。だから天なのである。そもそも帝王とは、天の子、人の長であり、その行為はきつと天の行為

にのつとるはずである。そもそも子とは、かならず父の教示・嚴命にしたがい、よくよく勘案してそれを行うべきである。(さすれば)その事は父の心づもりにかない、良家となるのである。もし父の教示にしたがわなければ、その家は何事もおさまらず、貧家となるのである。財産は逆に四散し、つねに集まらぬことに苦しむ。その事は紛紛として、災難は連続して起こり、愁苦は限りない。間違いはここにあるのである。

【注釈】

○五書 『後漢書』襄楷傳 初・順帝時・琅琊宮崇詣闕・上其師于吉于曲陽泉水上所得神書百八十卷・皆縹白素朱介青首朱目・號太平清領書・(章懷太子注)太平經曰・吾書中善者・悉使青下而丹目・合乎吾之道・迺丹青之信也・青者生仁而有心・赤者太陽・天之正色也・『太平經鈔』卷七・二十七葉表八行 吾書中善者・悉使青首而丹目・何乎・吾道乃丹青之信也・青者生仁而有正・赤者太陽・天之正色也・吾道太陽・仁政之道・不欲傷害・

○太平經卷之八十九八卦還精念文第一百三十

玄明内光，大幽多氣，與賢同位，壬癸之居。亥子共身，周流相抱，極陰生陽，名為初九。一合生物，陰止陽起，受施於亥，懷妊於壬，藩滋於子。子子孫孫，陽入陰中，其生無已。思外洞内，壽命增倍，不可卒致，宜以長久。少陽有氣，與肝共位，甲乙寅卯，青色相類。萬物之精，前後雜出，仁恩心著。『公羊傳』隱公元年「春者何，歲之始也」。唐・徐彥疏「夫萬物始生於震，震，東方之卦也，陽氣施生，愛利之道，故東方為仁矣。」

○太陽 『太平經鈔』卷四・七葉表九行 生養之道・少陽太陽・木火相榮・各得其願・

○天之心 『太平經鈔』卷四・三葉表二行 地者・順而承上・悉承天意・皆得天心・何有不安時乎・

○持正 『史記』東越列傳 繇王不能矯其衆持正・ 『漢書』蘇武傳 且單于信汝・使決人死生・不平・心持正・反欲鬥兩主・觀禍敗・

○積誠 孟郊「酬李侍御書記秋夕雨中病假見寄」秋風遶衰柳・遠客聞雨聲・重茲阻良夕・孤坐唯積誠・ 『真誥』卷七甄命授「庶幾積誠。」 卒獲微感。」 5a/7

○教令嚴勅 『晏子春秋』問上十八 景公問晏子曰・「明王之教民何若」・晏子對曰・「明其教令」 『漢書』文帝紀 上親勞軍・勒兵・申教令・

○志意 『荀子』修身 志意修則驕富貴・道義重則輕王公・ 『韓詩外傳』卷四 血氣平和・志意廣大・行義塞天地・仁知之極也・

【原文】

古者帝王將行・先仰視天・心中受教・乃可行也・夫皇后之行・正宜土地・地乃無不載・大小皆歸・中無善惡・悉包養之・皇后乃地之子也・地之心也・心憂凡事・子當承象母之行若母・迺為孝子・

夫天地之與皇后相應者・比若響之與聲・於其失小亦小・失大亦大・若失毫髮之間・以母不相得志意・

古者皇后將有為・皆先念后土・無不包養也・無不可忍・無不有常・以是自安・與土心相得矣・若失之・則災變連起・刑罰不禁・多陰少陽・萬物不茂・過在此・夫是二人正行者・則神真見・真道出・賢明皆在位・善物悉歸國・

【訓読】

古者帝王將に行わんとするに、先に天を仰視し、心中に教えを受くれば、乃ち行う可き也。夫れ皇后の行うや、正に土地に宜し。地は乃ち載せざる無く、大小皆な帰し、中は善悪無く、悉とく之を包養す。皇后は乃ち地の子也。地の心也。心に凡事を憂えば、子は当に母に象るの行を承くること母の若くすべく、迺ち孝子と為す。夫れ天地の皇后と相應する者は、響きの声との比若く、其の失小に於いては亦小、失大にしては亦大なり。若し豪髪の間失せば、母の相志意を得ざるを以つてなり。

古者皇后將に為す有らんとするに、皆な先に后土を念ず。包養せざる無き也。忍ぶ可からざる無く、常有らざる無し。是れを以つて自から安んじ、土心と相得たり。若し之を失わば、災變は連起し、刑罰は禁ぜず、陰多く陽少なく、万物は茂らず。過ちは此ここに在り。夫れ是の二人正しく行なわば、則ち神真は見れ、真道は出で、賢明は皆な位に在り、善物は悉とく国に帰る。

【口語訳】

むかし帝王は何かを行おうとするときは、まず天を仰ぎ見、その心中に教えを受けたなら、行つてよいのである。そもそも皇后の行為は、土地の意向に合致しなければならぬ。地はすべてを載せ、大小にかかわらずそこに帰し、地中では善悪の区別なく、すべてのものを包み込み養う。皇后はつまり地の子である。地の心である。その心ではあらゆる事を心配し、子は母のような行いを母のごとく継承してこそ、孝行息子なのである。そもそも天地が皇后と感應するさまは、あたかも声に応じる響きのごとく、(皇后の)過失が小さければ(天地の)反応も小さく、過失が大きければ反応も大きくなる。もし毛筋ほどのわずかな過失があれば、母たる皇后が天地の意向にあわなかつたからである。

むかし皇后が何かを為そうとするときは、いつでもまず后土(土地神)を思念する。(后土は)包み養わないものはないのである。なんでも耐え忍び、いつも常態をたもっている。このゆえに皇后は自ら安心し、后土の心と感通する。もしこの感通を失ったならば、災難は連続して起こり、刑罰は歯止めがからず、陰が増えて陽が減少し、万物は茂らない。間違いはここにあるのである。そもそもこの二人(帝王と皇后)がただしく行為すれば、神々や真人が出現し、真の道が出現し、賢人たちはみなしかるべき位につき、善人たちはみな国に帰る。

【注釈】

○凡事 『禮記』中庸 凡事豫則立・不豫則廢・言前定則不跲・事前定則不困・行前定則不疚・道前定則不窮・

○響之與聲 『太平經鈔』卷四・九葉表八行 所治者若人意・莫不皆響應而悅者・

○后土 『楚辭』九辯 皇天淫溢而秋霖兮・后土何時而得乾・『春秋左氏傳』熹公十五年 君覆后土而戴皇天・ 『國語』越下 皇天后土・ 『禮記』月令季夏之月 中央土・ ・ ・其神后土・

『同』檀弓上 君卒而哭于后土・(鄭玄注)后土・社也・

○神真 『真誥』卷九 十九葉裏七行 光暉合映・神真來尋・ 『度人經四注』卷二 十九葉裏二行 故諸天十方无量神真・乘輿御輦・上詣帝前・

○善物 『春秋左氏傳』昭公二十六年 兄愛而友・弟敬而順・夫和而義・妻柔而正・姑慈而從・婦聽而婉・禮之善物也・